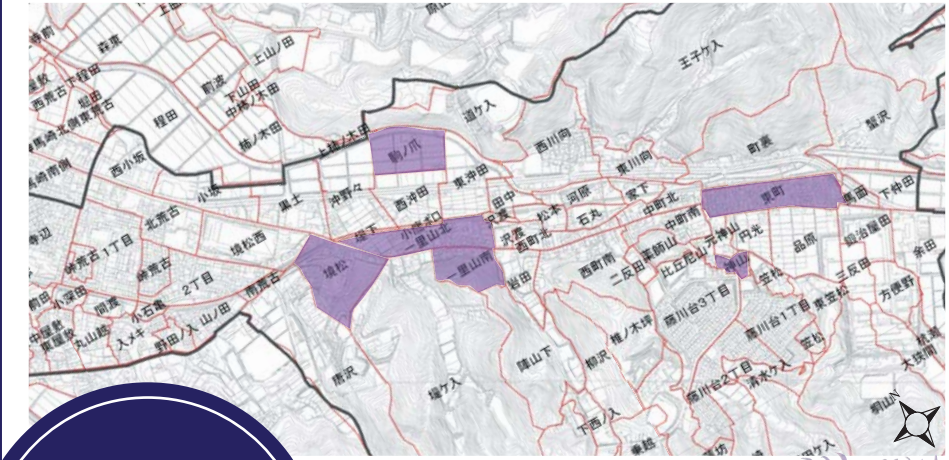
よもやま話

「地名」が伝える景観

まちの姿である景観は時代とともに変化しますが、地名の由来から昔の景観を想像できることもあります。地名には、その場が持つ地形や歴史などの特徴が反映されていることが多く、地域を知る手がかりとなります。

市場町字神山（ジンヤマ）	「神山」は「陣山」に通じるため、おそらく戦国期に武将の陣が張られた場所ではないかといわれています。
市場町字東町（ヒガシマチ）	現在は東町となっていますが、加宿された市場を、江戸時代は「新町」と呼ぶ人もいました。
藤川町字一里山（イチリヤマ）	一里塚があったことからつけられた名前ではないかといわれています。
藤川町字境松（サカイマツ）	まつ並木のある場所であり、藤川と蓑川の境の場所に松が植えられていたり、また、吉良道の分岐点であることからついた名前ではないかといわれています。
藤川町字駒ノ爪（コマノツメ）	山綱川沿いの山の斜面に、馬の「ひづめ」に似た「駒の爪」と呼ばれる馬蹄型の石があり、これが地名になったといわれています。



調べてみよう！

自分の地域の地名の由来や、地域で伝わる独特の呼び方がないかな？

藤川の名前の由来

藤川は、かつて「宇治川」といわれていたのを、藤の花が見事なことより、「藤川」と名前を改めたといういわれがあります。

第2章

藤川の景観の見方・感じ方

景観は「地域の文化を映し出す鏡」。
景観には地域固有の「自然・歴史・くらし」のすべてが表れています。
景観を丁寧に読み解くことはこのまちの魅力や価値に気づくことでもあります。
第二章では、藤川の「景観」に魅力を与えている要素に着目して景観の「見方・感じ方」を紹介します。

心地よさ（ここち）

心地よい空間のまとまりと距離感

藤川は歩いていて「心地よい」と感じられる規模のまちです。見通せる「奥行き感」と、ほど良い「囲まれ感」、そしてこれらが連続する「景観の変化」が楽しめます。

見通せる 奥行き感

藤川では、その地形条件から、季節感を生み出す山並みを背景とする、まちなみが広がっており、その眺望は、心地よい、ほど良い大きさで見通せる奥行き感が感じられるものとなっています。

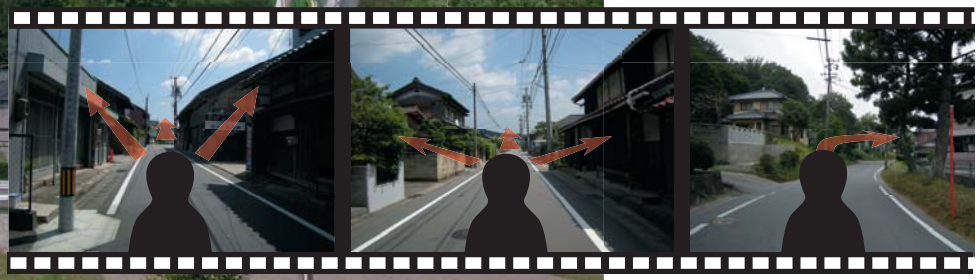
ほど良い 囲まれ感

旧東海道沿いでは、道路空間の幅と連続する建物の高さとのバランスがよく、圧迫感のない親密な、「心地よい」、ほど良い囲まれ感が感じられるものとなっています。

道路空間の幅（D）と沿道の建物の高さ（H）との比（D/H）は、道路の景観の性格を大きく左右します。D/H＝1～2 程度の場合、心地よい囲まれ感があるといわれています。

連続する 景観の変化

道の形状や沿道の建物、距離感などによって、連続した景観が多様に変化していく様子が楽しめます。曲り道は前方の視界が徐々に変化していく面白さがあります。



山アテ（やま）

日本古来の設計技法

日本には古来から、都市づくりの独特の設計技法として、通りの眺望を山にあてて町割りする「山アテ」があります。機能的かつ美しさを求める日本人の美意識の高さが感じられる技法です。

山アテの美学

富士山が目印となるように町割りされたまちなみの様子から、自然とくらしをつなぐ美しい景観があったことがうかがえます。

山に向かってまちなみが整備されています。

日本橋駿河町の富士山の山アテの景観
名所江戸百景　するがてふ　歌川広重

藤川の浮世絵の山アテ
五十三次名所図会　藤川　歌川広重

変わらずそこにある風景

美しさと機能性

「山アテ」は、見た目の美しさだけでなく、機能面からも優れています。

たとえば、道を整備するとき、目標が定まっていないと方向を見失いますが、山が見え、目印となることで、目的地の方向が明確になります。昔は現代のように正確な地図がなかったため、街道整備の方向を定めるために山が利用されることがよくありました。

江戸時代の人も見ていた山々

藤川でも山とまちなみとの一体感が一枚の絵のように見える場所があります。

実際に「山アテ」を意識してつくられたのかは定かではありませんが、江戸時代に街道を整備する際に、山を目印として道の方向を定めたのではないかと想像しながら歩くのも楽しいものです。

街道（かいどう）

歴史上、最も重要な幹線道路

藤川では国道１号が東海道とは別に整備されたため、まつ並木や街道の線形、幅などは大きく変化していません。このため、江戸時代の道路整備の工夫や知恵を現代のくらしの中で体感することができます。

多くのヒト・モノ・コトが 行き交った東海道

江戸時代の東海道は街道の中でも最も主要な道で、多くの人や物、情報、文化が行き交いました。今はその役割の多くを国道 1 号が担っていますが、藤川の総延長約 2.2km の旧東海道は、このまちでくらす人々にとって今も大切な道です。

街道には、一里塚や松並木、常夜燈などの施設が整備されていました。これは、現在の道路に街路樹や信号、道路標識があるのと同じように、安全かつ快適に人が移動するための重要な役割を担っていました。

江戸時代の道路整備

街道の必須アイテム

距離標（キロポスト）の祖
一里塚

東海道五十三次　隷書東海道　関

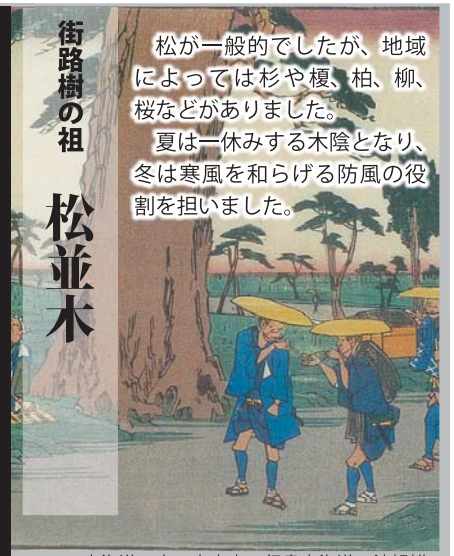
日本橋を起点として、一里（約3.9km）毎に築かれました。

一般には、高さ 2~4m の土盛りに榎や松が植えられました。旅行者の目印であるとともに、馬や籠の賃銭を払う目安にもなりました。

街路樹の祖
松並木

松が一般的でしたが、地域によっては杉や榎、柏、柳、桜などがありました。

夏は一休みする木陰となり、冬は寒風を和らげる防風の役割を担いました。



東海道五十三次之内　行書東海道　池鯉鮒

交通標識の祖
道標

街道の分岐点などに行き先を示した石柱や常夜燈が建てられました。地図やナビゲーションシステムのない時代には、重要な道先案内の施設でした。

まちのゲート

江戸時代のまちは、まちの境界がはっきりしていました。

街道と宿場町の境界には木戸と呼ばれる門があり、「みち」と「まち」の境界がはっきりと示されていました。木戸には牓（傍）示杭や常夜燈が整備され、場所によっては門番が見張っていました。

東海道五十三次之内　保永堂版　藤川　棒鼻ノ図

東棒鼻ポケットパーク

木戸の基本

ぼうじぐい 牓示杭	領地の境や国境、宿場の入口に目印に建てられた木杭や石柱です。
しゅくがこいいしがき 宿囲石垣	宿場の門として入口に石垣が築かれていました。
じょうやとう 常夜燈	社寺の参道では道の両脇に２つ置かれますが、木戸では通常１つでした。
ますがた 枡形	外敵の侵入を防いだり、大名同士が対面しないようにわざと見通しを悪くしています。

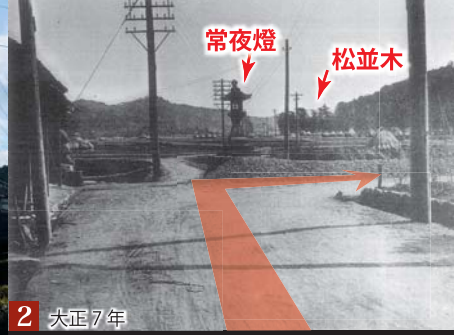
木戸は地域によって、東側と西側をそれぞれ「江戸方見附（みつけ）・京方見附」や「江戸口門・京口門」など呼び方が異なります。藤川では「東棒鼻（ぼうばな）・西棒鼻」と呼ばれています。

約1kmの間に約90本あまりのクロマツからなる「藤川のまつ並木」は、昔は松の根元が土手のように高かった様子が分かります。現在も、補植や清掃などの適正な管理により、見ごたえのあるまつ並木が続いています。

1 年代不明

まつ並木

曲手はその道筋が継承されているものの、常夜燈の位置が変わるなど、景観は今と昔では大きく変わりました。



2 大正7年

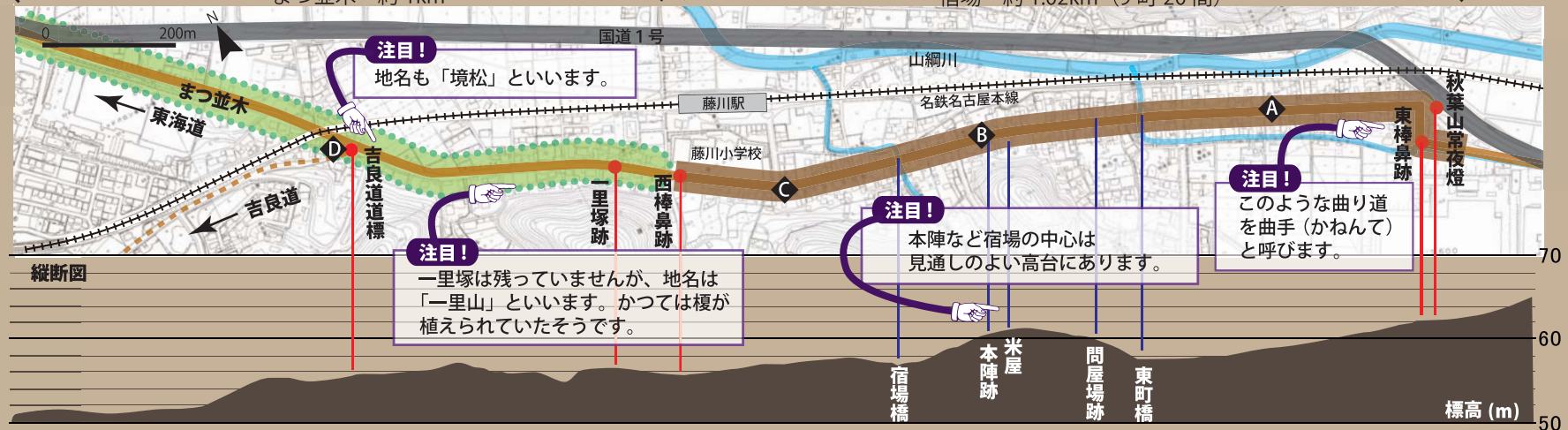
かねんて 曲手

写真提供
1 ふるさとの思い出写真集 299 明治・大正・昭和　岡崎 発行：岡崎地方史研究会
2 松坂昇一氏

今も息づく 街道の面影

街道（みち）	境界	宿場（まち）	境界	街道（みち）
山裾と地形に沿って緩やかに湾曲した道筋		加宿された市場村部分は直線的な道筋		外敵を防ぐために屈折した道筋

まつ並木　約1km　←→　宿場　約1.02km（9町20間）



D 街道の分岐
藤川町字境松

C 地形に合わせて曲る道筋
藤川町字西町

B 緩やかな下り道
藤川町字中町

A まっすぐ見通しのよい道筋
市場町字東町

歴史国道

藤川は、歴史的・文化的価値を有する道路である「歴史国道」として、平成8年3月　国土交通省より、「歴史国道東海道藤川宿」に選定されました。

宿場町（しゅくばまち）

まちの基盤構造

藤川宿は東海道37番目の宿場町として栄え、本陣と脇本陣が各1軒、旅籠屋が36軒、長さが東西に9町20間（約1020m）※ありました。宿場町を基盤とする町の構造は、現在のまちにも脈々と息づいています。

※東海道宿村大概帳　天保14年（1843）より

江戸時代のサービスエリア

宿場は、江戸時代に主要な街道沿いで交通の要地として幕府が認めた集落で3つの役割があり、これらの役割を果たすために必要な施設が整備されました。現在も史跡案内板や屋号などからその位置を知ることができます。

宿泊施設の提供

本陣・脇本陣（ほんじん・わきほんじん）
幕府の大名や公家が泊まる施設

旅籠屋（はたごや）
一般の人が泊まる施設

木賃宿（きちんやど）
素泊まりの安い宿

人馬の荷物の中継

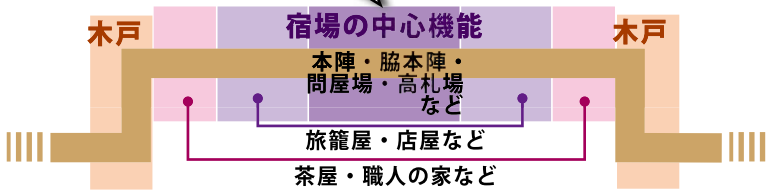
問屋場（といやば）
役人がいて、幕府の公用旅行者のために人馬や宿を世話したり、飛脚の管理をしました。

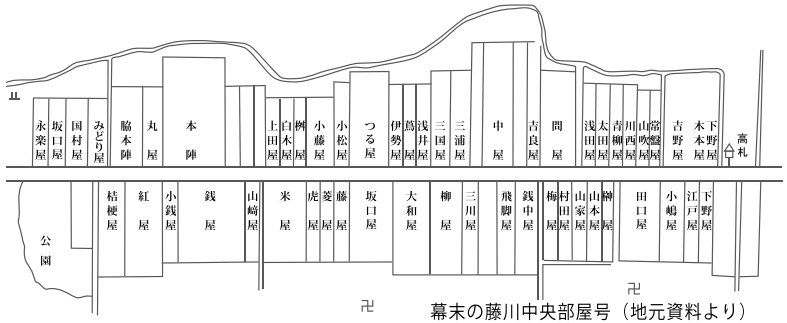
情報の伝達

高札場（こうさつば）
幕府の法令や禁令、人馬の料金などを板札に掲示しました。

一般に宿場町の基本構造は、中心に本陣、脇本陣、問屋場などの宿場の重要な施設が配置され、その周辺に旅籠屋（旅館）、茶屋などの店がならんでいました。

幕末の資料によると、藤川町字中町周辺には多くの旅籠屋や茶屋など多くのミセ（店）がありました。





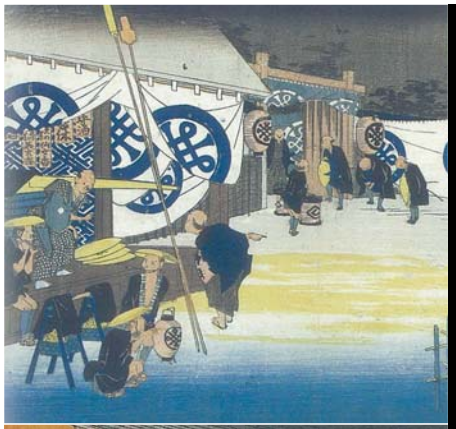
幕末の藤川中央部屋号（地元資料より）

交流とにぎわい

本陣・脇本陣

本陣前には大名が出立するための支度をする人々が集まっています。

大名の宿泊建物は、門があるなど格式ある造りでした。



旅籠屋

庶民が宿泊する旅籠屋前は、休憩する人や客引きなどで賑わいました。

旅籠屋に着くと、洗い桶で足をすすぎました。

問屋場

荷物や文書を運ぶ馬や飛脚などは、問屋場で、役人の管理の下で荷物の積み換えを行うために、行列をつくっていました。

右上）保永堂版東海道　関　本陣早立　歌川広重画
右中）隷書版東海道　赤坂　歌川広重画
右下）東海道五拾三次之内　保永堂版　藤枝
左下）藤川　葛飾北斎